

# Y 大学病院における夫立ち会い分娩に関する意識調査

A Survey of the Pregnant Women's Attitude Towards a Delivery  
with the Husband at Y University Hospital

秋山さとみ<sup>1)</sup>, 小泉夫美子<sup>1)</sup>, 坂本 智香<sup>1)</sup>, 風間 沙織<sup>1)</sup>, 杉田 節子<sup>1)</sup>, 小林 康江<sup>2)</sup>

AKIYAMA Satomi, KOIZUMI Fumiko, SAKAMOTO Chika, KAZAMA Saori, SUGITA Setsuko, KOBAYASHI Yasue

## 要 旨

妊産婦のニードの増加に伴い、Y大学病院(以下Y病院とする)では、夫立ち会い分娩を導入する方向となった。それに先立ち、Y病院における分娩に対するニードや、夫立ち会い分娩に対するニードの有無、またその内容をあきらかにすることを目的に調査した。Y病院の特性をふまえ、夫立ち会い分娩導入にむけて、以下の示唆を得た。Y病院は大学病院という特性上、ハイリスク妊婦が多い。そのため、妊婦の分娩に対するニードは、安全や安楽が重視されている。夫立ち会い分娩は44.4%の妊婦が希望し、その理由としては分娩を夫婦で体験する、父性の自覚が高まるが多かった。夫立ち会い分娩導入に向け、安全性への配慮とともに、父性の向上や夫婦共同作業としての分娩を提示できるような体制を構築する必要性が示唆された。

キーワード 夫立ち会い分娩, 妊産婦のニード, 父性, 意識調査, 助産

Key Words Delivery with the Husband, Need of Pregnant Woman, Fatherhood, Attitude survey, Midwifery

## はじめに

近年、妊産婦のニードが多様化し、母児ともに安全な分娩であることはもちろん、妊産婦や夫婦、家族が主体的に取り組み、満足できる分娩が求められ、様々な分娩が行われるようになってきている<sup>1)-3)</sup>。その中の一つとして「夫立ち会い分娩」があり、多くの施設で実施されている。

日本における夫立ち会い分娩は、1970年代からラマーズ法が導入され、その後徐々に夫立ち会い分娩が広まっていった<sup>1,4)</sup>。関根は、「夫立ち会い分娩は妊娠期から夫婦が互いに協力し、分娩への不安、苦痛、恐怖などを乗り越えて感動的な分娩体験をし、その後の子育てを相携えて行うための基本的出発点にするという意義をもつ」と述べている<sup>5)</sup>。

Y大学病院(以下Y病院とする)においては、Y県内の周産期システムが機能しはじめたことにより、妊娠35週未満、2000g未満の新生児は母体搬送、または新生児搬送となり、周産期を取り扱う基準が変化してきている。

また、Y病院でも妊産婦の間から夫立ち会い分娩希望の声があったが、大学病院という特性上、ハイリスク妊婦が多く、分娩時においても安全性への追求が優先され、そのニードを十分満たすことができない現状にあった。

大学病院はその特性上、緊急の入院・処置および手術に対応する高度医療の場であることから、処置や診察が行いやすい環境が優先されている傾向にある。そのため、分娩は清潔な場で行われるべきであるという風潮があり<sup>3)</sup>、Y病院においても、これまで産婦を家族から隔離していた。

しかし、このような状況下でも妊産婦個々のニードを満たす事は重要と考え、助産師、看護師の間でも看護の側面から夫立ち会い分娩導入の要望がでてきていた。

そして今回、夫立ち会い分娩導入を検討するために、実際Y病院の分娩に対し、妊婦は何を求めているのか、夫立ち会い分娩のニードはあるのかを明らかにすることを目的に調査を行った。さらに、Y病院の特性をふまえ夫立ち会い分娩導入に向けての示唆を得た。

## 用語の操作的定義

夫立ち会い分娩とは分娩第 期から第 期ないし第 期まで夫が妻のもとに付き添い、妻の身体的・精神的サポートをし、児出産の場面に立ち会うこと。

受理日：2006年1月25日

1) 山梨大学医学部附属病院看護部：University of Yamanashi Hospital

2) 山梨大学大学院医学工学総合研究部(母性看護学)：Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, (Maternity Nursing & Midwifery) University of Yamanashi

## 研究方法

### 1. 対象者

Y病院産科外来通院中の妊婦(週数不問, 初産・経産不問)100人。

### 2. 調査期間

2005年2月9日～3月9日。

### 3. 調査方法

外来受診の待ち時間中に質問紙調査の同意を得られた妊婦に質問紙(多肢選択形式)を配布し, 記入後回収箱にて回収した。

### 4. 調査内容

アンケート項目は, 対象の属性(年齢, 職業, 初産・経産, 妊娠週数), Y病院を選んだ理由, 望む分娩様式, 夫立ち会い分娩に関する5項目(夫婦で夫立ち会い分娩について話をした事があるか, 夫立ち会い分娩を希望するか, またその理由, 夫は夫立ち会い分娩を希望すると思うか)などであった。

### 5. 分析方法

有効回答が得られたデータに対し, 単純集計,  $\chi^2$ 検定を行い,  $p < 0.05$ を有意とした。

### 6. 倫理的配慮

質問紙は無記名とし個人が特定できないようにした。また, 調査への参加は自由意志であり, 参加の有無による治療や看護上の不利益が生じないことを説明した。

## 結果

アンケート回収数は, 90人(回収率90%)であった。

### 1. 対象の属性

妊婦の平均年齢30.8歳(SD5.0), 夫の平均年齢32.9歳(SD5.9), 初産婦49人(54.4%), 経産婦41人(45.6%)であった。妊娠の時期は妊娠初期25人(29.4%), 妊娠中期48人(56.5%), 妊娠後期12人(14.1%)であった。

### 2. Y病院で妊娠管理を希望した理由

90人から207の複数回答が得られた。

「異常時, 緊急時の対応を考えて」が最も多く, 64人(30.9%), 「大学病院なので設備が整っている」47人(22.7%), 「近い」42人(47.2%)の順となった(図1)。

### 3. どのような分娩をしたいか

90人から172の複数回答が得られた。

「安全な分娩」が82人(47.7%), 「楽な分娩」30人(17.4%), 「家族にサポートしてもらおう分娩」21人(12.2%)の順となった(図2)。

### 4. 夫立ち会い分娩希望の割合

希望する人40人(44.4%), 希望しない人27人(30.0%), 分からない人23人(25.6%)であった(図3)。

夫立ち会い分娩希望有無別に, どのような分娩がしたいかみてみると, 安全や安楽な分娩をしたいという人は, 夫立ち会い分娩を希望する・しないにかかわらず, ほとんどの人が選択していた。さらに, 夫立ち会い分娩希望者40人中, 「どのような分娩をしたいか」において, 「家族にサポートしてもらおう分娩」を選択した妊婦は18人(45.0%)であり, 夫立ち会い分娩を希望しない人27人中では「家族にサポートしてもらおう分娩」を選択した人は一人もいなかった( $\chi^2=0.031, p=0.000$ ) (図4)。

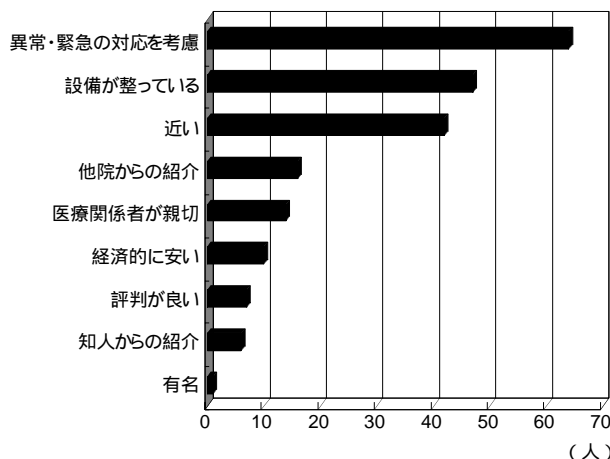


図1 Y病院で妊娠管理を希望した理由(複数回答)

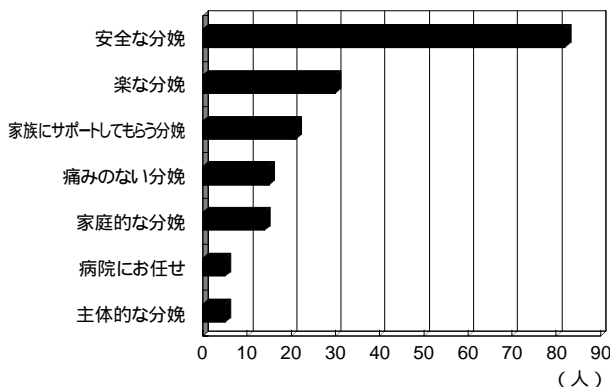


図2 どのような分娩をしたいか(複数回答)

「家族にサポートしてもらおう分娩」以外で、「どのような分娩をしたいか」のそれぞれの理由で、夫立ち会い分娩を希望する群と希望しない群とで比較したが、有意差はなかった。

5. 夫立ち会い分娩を希望する理由

40 人から 87 の複数回答が得られた。

「分娩を夫婦で体験したい」が 32 人(76.2%),「父親の自覚が高まる」が 17 人(40.5%),「一人では不安」、「夫にも分娩の辛さを分かかって欲しい」がそれぞれ 14 人(33.3%)であった(図 5)。

夫立ち会い分娩を希望する理由を年代別や分娩経験の有無と比較したが、有意差はみとめられなかった。

また、「夫立ち会い分娩を希望しない理由」では、「助産師がいればよいから」が 4 人(13.8%),「夫の仕事の都合がつかない」が 4 人(13.8%)で上位を占めた。

考察

1. Y 病院の分娩に対する妊婦のニーズ

Y 病院は高度医療に対応する大学病院という特性上、リスクを伴う妊婦が多い。そのため、Y 病院で妊娠管理を希望した理由は「異常、緊急時の対応を考えて」、「大

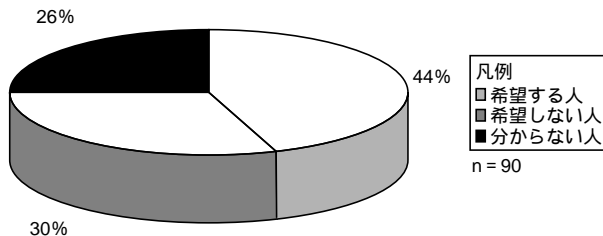


図 3 夫立ち会い分娩希望の割合

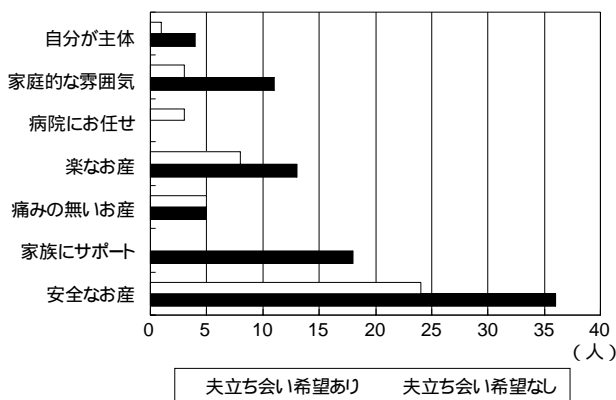


図 4 夫立ち会い希望有無別にみたどのような分娩がしたいか

学病院なので設備が整っている」などの安全面を優先とする理由が大半を占めている。

どのような分娩がしたいかでは、「安全な分娩」、「楽な分娩」と回答している妊婦が多い。これは、マズローの欲求段階において、生理的欲求、安全の欲求は土台になるものであり<sup>6)</sup>、人間の基本的ニードである。そのため、妊婦の分娩に対する希望も安全や安楽を重視しているのは当然の結果と考えられる。

どのような分娩がしたいかで、安全や安楽のニードの次に来るものとして、「家族にサポートしてもらおう分娩」、「家庭的な雰囲気分娩」が多い。小野は、「安全性を追求するだけでは必ずしも分娩の満足度を高めることにはつながっていかない<sup>7)</sup>と述べている。分娩時において、アットホームでリラックスできる居心地の良さや対応は重要であり、安全性の追求を優先してしまうことにより、機械的・事務的な冷たい雰囲気の中で分娩したという印象を与えてしまう可能性がある<sup>3)</sup>。そのため、快適性や夫婦の主体性も考慮したケアを提供していく必要がある。

2. 夫立ち会い分娩のニードの有無

夫立ち会い分娩の希望者は 44.4%であり、分からない人 25.6%, 希望しない人 30.0%であった。遠藤らは、「夫立ち会い分娩を希望する妻の割合は 5割, 3割, 7割と文献により夫立ち会い分娩を希望する妻の割合は異なっていた」と述べている<sup>1)</sup>。今回の調査中は夫立ち会い分娩をアピールすることはしていなかったが、はっきりと「希望しない」と回答する妊婦を除けば、夫立ち会い分娩に対するニーズは高い傾向にあると言える。

その中で、夫立ち会い分娩希望者は「どのような分娩をしたいか」において、「家族にサポートしてもらおう分娩」を選択した割合が高い傾向にあった。夫立ち会い分娩は分娩時に夫が妻の身体的・精神的サポートを行うという目的からして、当然の結果であるといえるが、夫立ち会い分娩時は特に、夫が妻をサポートできるよう支援したり、分娩前教育において分娩時の夫の役割りを明確にし、具体的な妻の援助方法を指導していく必要がある。

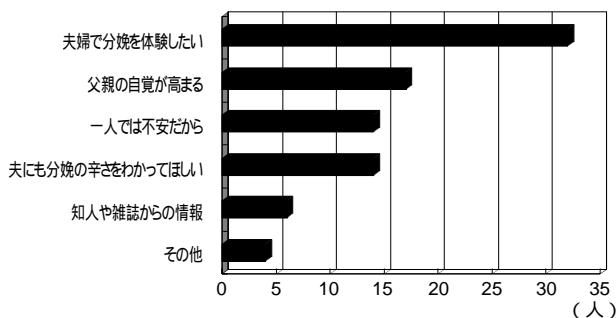


図 5 夫立ち会い分娩を希望する理由(複数回答)

夫立ち会い分娩の希望理由では、「夫婦で分娩を体験したい」、「父親の自覚が高まる」が多かったため、妊娠中からこれらのことを考慮した指導が必要になってくる。

### 3. 夫立ち会い分娩導入に向けての示唆

今回の調査で、Y病院で妊娠管理を希望した理由や、どのような分娩をしたいかにおいて、安全・安楽を重視する傾向が高かった。どのような分娩をしたいかにおいては、安全・安楽の次にくる希望として、「家族にサポートしてもらおう分娩」や、「家庭的な分娩」を選択していた。また、夫立ち会い分娩希望者はどのような分娩をしたいかにおいて、「家族にサポートしてもらおう分娩」を選択している傾向が高かった。

これらの安全性を求めるニーズと、快適性、主体性を求めるニーズをどのように調和させるかは難しいことではある。安全に対するニーズへの取り組みとして、分娩時の異常時や緊急時の対応について、夫婦共に理解してもらえよう、分娩前教育で指導していくことなども必要である。しかし、安全性のみを追求する分娩時のケアを行うだけでは夫婦の満足する分娩体験にはなり得ない。そのため、妊娠中から父性の向上や、分娩を夫婦の共同作業として参加できるように、夫婦に対して妊娠中からサポートを提供する必要性が示唆された。

### ・結論

1. Y病院の分娩に対する妊婦のニーズは、安全や安楽が重視され、その次に家族にサポートしてもらおう分娩や、家庭的な分娩が多かった。
2. 夫立ち会い分娩に対する妊婦のニーズは高い傾向にあり、夫立ち会い分娩を希望する理由は、分娩を夫婦で体験する、父性の自覚が高まるが多かった。
3. 夫立ち会い分娩導入に向けて、安全性の確保とともに、父性の向上や、夫婦共同作業としての分娩が提示できような夫婦に対するサポート体制を構築する必要性が示唆された。

### 謝辞

本調査にご協力いただいた妊婦の皆様に深く感謝いたします。

### 引用文献

- 1) 遠藤恵子, 小松良子, 他(2001)「夫立ち会い分娩」に関する研究の動向, 山形保健医療研究, 第4号: 1 - 2
- 2) 小林俊江, 常井暁子, 他(2001)当院における夫立ち会い分娩の評価～24組のアンケート結果から～, 茨城県母性衛生学会誌, 第21号: 36

- 3) 中下真紀, 諸見智子, 他(2001)大学病院における立ち会い分娩に関する意識調査 - 立ち会い分娩導入に向けて -, 茨城県母性衛生学会誌, 第21号: 41
- 4) 石井康夫(2001)リラクゼーションと和痛の工夫(1)ラマーズ法と家族立ち会い分娩, 産科と婦人科, 第68巻, 7号: 884 - 885
- 5) 関根憲治(1991)夫立ち会い分娩, 周産期医学, 21(10):1543 - 1545
- 6) フランク・ゴープル(著)(1983), 小口忠彦(監訳), マズローの心理学, 産業能率大学出版部, 東京,